

厳翼・王堂プラグマティズム論争考

著者	山田 英世
雑誌名	筑波大学哲学・思想学系論集
巻	5
ページ	1-21
発行年	1980-03
URL	http://doi.org/10.15068/00157545

蔽翼・王堂プラグマティズム論争考

山 田 英 世

一 明治期におけるプラグマティズム理解の教科書的範型

同文館発行の『大日本百科辞書』の一部をなすものとして、明治三十六年七月に編集に着手し、同四十五年六月にその編集作業を終えた『哲学大辞書』全四巻の出版は、十八世紀のフランス啓蒙思想がアンシクロペディストによって定型化されたのとおなじ意味で、我が国十九世紀の啓蒙思想ないし啓蒙哲学の、明治末期における一応の範型化の完了を象徴する一つの記念碑的な出来ごとであったといつてよいであろう。⁽¹⁾

この『哲学大辞書』は、哲学概論、哲学史、論理学、認識論等、二十八の広汎な分野にわたる辞書であつて、明治期の我が国の哲学的諸学が到達した最高の水準を示している。執筆者は当時の斯学の代表的学者を網羅しており、たとえば、「哲学及哲学史」の各項は、井上哲次郎、大島正徳、北沢定吉、朝永三十郎、波多野精一等が、「論理学」の各項は、桑木蔽翼、今福忍、紀平正美等が、そして「倫理学」の各項は、得能文、友枝高彦、中島力造、中島徳蔵、深作安文、藤井健治郎、吉田静致、大島正徳等が、それぞれ担当している。これらの人びとは当時の『哲学雑誌』、『丁酉倫理会倫理講演集』等の誌上に論陣を張った哲学界・思想界の権威もしくは新進気鋭の学者たちであつた。この執筆陣のなかに、当時すでに『哲学雑誌』に独創的な哲学論文をいくつか発表していた西田幾多郎の名をみいだし得ないのは不思議であるが、それはともかくとして、われわれは、この『哲学大辞書』のなかに、桑木蔽翼の執筆になる「プラグマティズム」の解説文をみいだすことができる。⁽²⁾

この解説文は、およそ六千四百字にのぼるかなりの長文で、プラグマティズムの語義、意義、沿革、文献の四項目について解説を施してい

る。まず「語義」の項では、プラグマティズムは「実用主義、或は実際主義と訳す。一言に約すれば、真理の標準を實際上の効果如何に由りて定めんとする方法」をいうのである、としている。プラグマティズムという語をはじめてこの意味で使用したのはアメリカの数学者「ピアース」(Peirce)であって、彼がこの語の使用を着想したのは、カント哲学の研究を機縁としてのことであつた。さらにプラグマティズムの名と切り離し得ないのは「ジェームズ」(James)である。ジェームズは、プラグマティズムの語源はギリシア語の「ブラーグマ」に求めることができ、それは「ブラクシス」すなわち「実行」と同根であるとしている。このことに基つて桑本は、「此点より言はば此語を主行主義と訳す〔る〕を得べし」ともいつている。「要するに大体に於てはプラグマティズムはピアースの解せるが如く、行為或は其効果を主とする哲学説と見て可なり」である。

この語が主として哲学界に用いられるようになったのは、ピアースがいつているように、ジェームズの功績であつた。ジェームズは、はじめ、根本的経験主義 (Radical Empiricism) の語を用いたが、結局プラグマティズムという語をそれと同一の意味で用いるようになった。また、シラー (Schiller) は、自分の哲学的立場を表わすのに、はじめは、人形主義 (Anthropomorphism) の語を用いたが、後でプラグマティズムの語にあらため、さらに人本主義 (Humanism) にあらためた。さらに、「デュ〔エの誤り〕」⁽³⁾ は器具主義 (Instrumentalism) の語を用いており、近頃ではまた人格的唯心論〔ここには原語は示されていないが、別項によれば Personal Idealism である〕の語が広く行われている。以上のように、プラグマティズムの同義語といわれるべきいくつかの術語を列挙した後で、桑本は、これらの各語の背後にある基本的思想を説明して、次のように断じている。「プラグマティズムは恰かもヒューマンイズムの認識論的基礎に相当するものといふべし……。要するにプラグマティズムは哲学攻究の態度方法の名にして、之を『プラグマティックメソッド』即ち実用主義的方法と称するも其意義に於ては全く異なる所なし。」

次に、プラグマティズムの「意義」について、桑本は、シラーが一九〇五年四月の『マインド』誌に掲載した論文に依拠して、プラグマティズムに関する七種類の定義を列挙し、プラグマティズムとは、「要するに真理を以て客観的に確定せるものとする説に反し、主観的要求に従て時々刻々に決定せらるるものとする説にして、『真理は實際的效果を有するものたるべし』 (Truth should have practical consequences.) との句は其大意を示せるものといふべし」と要約する。

また、桑木は、シラーの著書『ヒューマニズム』のなかの「真理」と題する論文に依拠して、シラーの真理論を紹介した後、プラグマティズムの一般的性格を次のようにまとめている。「先づ認識の本質に関しては實在論に対して観念論を取り、認識の起源に関しては理性論に対して経験論を執り、心理的根拠に於ては主意説に拠り、説明の方法としては社会的淘汰の説を導き、「」認識の目的としては利用を挙げ。即ち経験論・観念論・主意説・功利説等を其主要なる成素となす。…」

次に、プラグマティズムの「沿革」の項。ジェームズがその著書『プラグマティズム』において、プラグマティズムをもって「古き思想法に対する新しき名」と呼び、このプラグマティズムの思想的流れを、ソクラテス、アリストテレス、ロック、バークレー、ヒュームの系列にみいだしていることを紹介するとともに、シラーがプロタゴラスの「人は万物の尺度なり」という考え方のなかに自己の立場を発見した旨を述べている。そして、シラーのごとく「知行共に同一精神作用より出で、然も行の方〔が〕知よりも前に存在し、首位を占む」とするのがプラグマティズムの見解であるとし、これはプラトン風の一元論に基づいてカントの結論に到達したものであると解釈している。

「此説は既に述べたる如く、其初米国のピアース・ジェームズ等によりて唱へられ、米国のデュエー、英国のシラー等又其説と歩調を同くし、英米の学界に於て最も盛に行はる。」しかし英米においてさえ、すでにさまざまな異説が行われているし、ドイツの学者はプラグマティズムに対して一般に反対排斥の態度をとっているが、なかには「識らず知らず」のうちに同意見を有するジンメルのごときもある。また、オーストリーのイエルサレムはジェームズの著書を翻訳して、みずからプラグマティズムの「勇将」をもって任じている。比較的公平細密にして同情ある批評を試みているのは、オイケン、ヴィンデルバンド等である。

以上が桑木によって要約されたプラグマティズムの「沿革」であり、同時に「現状」の説明である。

最後に「文献」の項。数年前までは、英米の哲学関係の諸雑誌に掲載されたジェームズ、デュエー、シラー等の論文と、Sturt; *Personal Idealism*. Schiller; *Riddles of the Sphinx*. Humanism. *Studies in Humanism*. Dewey; *Studies in Logical Theory*. 等がプラグマティズムに関する主要な文献であったが、一九〇七年にジェームズの『プラグマティズム』が出版されてからは、文献の数も増大してきた。その主なものとしてあげられるのは、ジェームズの『多元的宇宙』、『真理の意味』をはじめとして、プラット、ムーア、オスリヴァン、パウデン、シュニッツ、ボルドー、ヤコービ、シュタイン、オイケン等の解説書あるいは研究書である。また、プラグマティズムに関する邦語の論文には、

『哲学雑誌』、『教育学術界』、『丁酉倫理会倫理講演集』等に散見される紀平、得能、田中喜一（王堂）および桑木自身のものがあり、桑木は、また、自分の著書『性格と哲学』（明治三十九年十月、有倫堂）のなかに、本稿の主題である蔽翼・王堂論争の出発点となった論文「プラグマティズムに就て」（明治三十九年一月・二月）を再録したとことわっている。そして、明治四十四年一月発行の『教育学術界』に「ヴィンデルバントのプラグマティズム評論」を掲げ、四十三年十一月発行の『芸文』に載せた「ウィリアム・ジェームス」においてもプラグマティズムに論及した、と桑木自身の業績について語り、以上の長いプラグマティズム解説を終わっている。

さて、私が、右のように、あえてかなりくわしく桑木の解説文を引用・紹介したのは、この解説が明治期における我が国哲学界のプラグマティズム理解の学問的水準を示すと同時に、我が国の哲学研究者たちのそれ以後のプラグマティズム観の教科書的範型をなすものとなったからであり、また、この『哲学大辞書』のプラグマティズム批評の原型が、すでに、桑木がみずからの著書に再録したとことわっている先述の論文「プラグマティズムに就て」において、ほぼできあがっていたという理由によるのである。すなわち、我々の主題である蔽翼・王堂論争の発端となった右の論文は、いちはやく我が国におけるプラグマティズム評価の公認路線を準備し、やがて、『哲学大辞書』の權威において、その路線を確定的なものにしたのである。

二 論争の発端

さて、蔽翼・王堂論争の発端となった桑木の「『プラグマティズム』に就て」という論文は、『哲学雑誌』第二一卷第二二七号（明治三十九年一月）と次の第二二八号（同年二月）との二回にわたって掲載されたもので、前後あわせて六十頁におよぶ長編である。この論文の内容は、前年の明治三十八年十二月十八日、東大の山上集会所で開かれた哲学会における桑木の講演を筆記したものに、桑木が手を加えたものである。講演であるために、文章がやや冗長で、わかりにくい部分もある。しかし、その要点は、前節で要約した『哲学大辞書』の桑木のプラグマティズム解説で述べられているものと同じであるといつてよい。ただ、プラグマティズムに対する批判そのものは、この最初の講演の場合の方がは

るかに尖鋭なものがあつた、その故にこそ、王堂のはげしい反論をひきおこすことにもなったのである。

桑木が、かの講演において示した彼のプラグマティズムに関する知識は、『哲学大辞書』の場合とおなじく、やはり、パース、シラー、ジェームズの論文をその主要な情報源としていた。パースのものは、一八七七年（明治十年）からその翌年にかけて、『*The Popular Science Monthly*』に連載された六編の論文——おそらく、そのうちの『*Fixation of Belief*』と『*How to Make Our Ideas Clear*?』とが主に参考にされたであろう——と、一九〇五年（明治三十八年）四月の『*Monist*』に掲載された論文『*What Pragmatism is*』とである。そして桑木がまず読んだのは後者の論文であつて、これを通じて前者への言及もなされたもののようである。次にシラーのものは、著書『*Riddles of Sphinx*』, 1891. 論文『*Axioms as Postulates*』, 1902. 著書『*Humanism*』, 1903. のなかの「真理論」および前出の論文『*The Definition of Pragmatism and Humanism*』1905.⁽⁴⁾などが参考にされ、とくに最後のものに主に依拠している。ジェームズのものは、この論文でははっきりと指示してはいないが、内容的にみて、シラーの論文からの示唆によって読んだジェームズのカリフォルニア大学における講演『*Philosophical Conceptions and Practical Results*』1898.（同大学出版）を主要典拠としているようである。そして、全体としては、桑木は、シラーの前記『*Definition*』の論文の紹介・批評の部分を骨格として、それにジェームズ説を加味して彼のプラグマティズム観を作りあげ、パースの名はそえるにとどめた、というのが真相であつたと考えられる。

デューイの学説については、桑木は、直接には読んでいなかったようである。デューイのことは、シラーの前掲論文『*Definition*』のなかの注で、シラーが「プラグマティズム」あるいは「ヒューマニズム」という言葉の代りに、「デュエー」の「インストルメンタリズム」という言葉を使用してよいが、この言葉は語学上非難を受けてもおり、また、美的でないので、用いないことにする。しかしその意味は前二者とおなじようなものである、といっていることを紹介する際に、その名を出している程度である。要するに、デューイは、まだ、アメリカ・プラグマティズムを代表する哲学者になりきつてはいなかったし、たんにプラグマティズムの同調者の一人として語られるにとどまっていた。

ちなみに、右のシラーの論文は、『*丁西倫理会倫理講演集*』四一号（明治三十九年二月）に、「エフ・シー・エス・シルラー、プラグマティズム 実用主義及び人道主義の定義」と題して、その「泰西思潮」欄に紹介されている。これは無署名であるが、おそらく、桑木自身か、あるいはその側近者の執筆になるものであろう。その筆者は、このなかで、前述のジェームズのカリフォルニア大学における講演「哲学的概念作用及び実結果」を

とおして、パースがプラグマティズムの命名者であること、また、「デューニー教授」の重要な著述のことを知ったという旨のことを述べている。このデューニーの重要な著述というのは、デューニーが「シカゴ学派」の成立を宣言した彼の編著『*Studies in Logical Theory*』(1903)のことであろうと思われるが、先きにも触れておいたように、桑木はこの書をみずから読んだわけではない。いずれにせよ、明治期におけるプラグマティズムの哲学の最初の輸入・紹介が、桑木等によって、右にみたように、ジェームズ——とくにその実用主義的側面における——およびシラーを媒介者としてなされたことは、この二人が、パースの概念明晰化のための論理学的意図としての主知主義的プラグマティズムを、知識の「実用性」を強調する主意主義的方向へ転換せしめた人たちであったことを考えあわせると、我が国の哲学界におけるプラグマティズムの爾後の運命にとって、あまり幸せなことではなかったといわなければならない。

さて、桑木のプラグマティズム批評の内容の問題に入ろう。この講演において、桑木は、プラグマティズムを、次のように要約している。すなわち、プラグマティズムは、心理学的には主意説を根拠とし、哲学すなわち認識論及形而上学の方面からみれば経験論・観念論・唯心論を根拠にしている、というのがそれである。

まず前者について。プラグマティズムの主意説は、主知説を否定して、すべての知識の根源を意志の活動に求める。「けれども此『活動』といふことは所謂『意志』といふことと全然同じといふことは出来ない。……若し根本的活動からして知識活動も出たとし、『意志活動をもふくめて』総ての活動も出たといふならば宜いのでありますけれども、意志の活動から『知識活動が』出たといふことになると或は其処の説明が困難でないかと思ふ。」(『哲学雑誌』二二八号、一二頁) 意志活動はすでににらかの目的を有するものであり、そのかぎりにおいて知的なのであって、意志は知識とともに成立しているのである。したがって、そのような複雑な意志の活動から知識の活動が出てくるということになると、「根本的の智の働を説明しているのではない」(同上、一三頁)ことになる。このように、桑木は、プラグマティズムの主意説の論理的欠陥を指摘する。

そこで、もしプラグマティズムが、意志の目的は、はじめは無意識的なものであって、この「目的に向ふ活動からして次第々々に智の働も生じたのであると、斯く説くならばそれは当って居るかも知れぬ。併ながら其時には実用といふ観念からして知識といふものが出たといふ説は成立たなくなつて来ると思ふ。なぜかといふと実用とかいふことは意識的にあるもので自然に本能として居る働と違ふからである」(同上、一三

一四頁) これは、プラグマティズムの主意説的心理学にとってはその論理的欠陥に対する重大な批判といえるものであろう。「『プラグマティズム』でいふやうに真理は実用から総て割出したものだといふことは余りに牽強附会の言ひ方でありはしないかと思ふ。」(同上、一四頁) かくして、桑木は、次のように述べる。「根本の知的活動はまだ実用とか否とかを判別することの出来ぬ前にあるもので、此処では心理上の根拠で智的活動が意的活動から出て居るといふことの誤って居るといふことを一言述べて置いたのである」(同上)と。私は、ここで、とくに、桑木の「根本の知的活動はまだ実用とか否かとを判別することの出来ぬ前にあるもの」という表現に注意したいと思う。というのは、これが桑木のプラグマティズム批判の重要な論点であるばかりではなく、これが、ジェームズの純粹経験における主客未分性の主張とともに、得能、西田等の純粹経験論への有力な示唆となり得るものであったと考えられるからである。

次に、後者のプラグマティズムの哲学的根拠について。桑木はいう。シラーの『公理即設想論』[Axioms as Postulates, 1902]の説によれば、「世界は詰り経験に過ぎない……、其経験は自分自身の経験といふことである。其自分自身の経験といふものは……分つこのと出来ないものであつて究極のものである……。次に経験とは何の経験かといふ問題があるが、それは我々が見て居る世界である。」(同上、一七一―一八頁) 眼前の世界は外界に客観的に存在するものではなく、「我々自ら造り出したものである。……故に此論者「シラー」から言はせまうといふと、世界は全く経験以外に何物もないと云ふことになる。」(同上) 公理は我々の経験のなかで必要なものとして「設想」(ポステュレート)したものであり、偶然のものである。プラグマティズムに反対する者は、この点で「プラグマティスト」と意見を異にするのであつて、「何か世の中に経験以上に不変なる所の原理といふものがあつて、それからして公理が出て来るので、〔その原理は〕唯経験から造られたものでない、経験を統一して居る所の一つの原理である」(同上、一九頁)というように考えるのである。

さらに進んで、桑木は、次のように批判を展開してゆく。「第一に此『プラグマティズム』の論者は起、源、と本質との説明の区別をして居らぬやうに見える。」(同上、二〇頁) つまり、歴史的視点と論理的視点とを混同している。「それから第二に、此論者は飽までも主観的觀念論を主張すると云はなければならぬ……。」(同上、二二頁) この二つの批判のうち、桑木自身も、第一の点については、歴史的説明が同時に論理的説明にならなければならないとはするのであるが、プラグマティズムにおいては、人生における「智」の「起源」としての「実用」ということの論理的、物理学的、政治社会的な種々相の区別があいまいであつて、したがつて、「公理」の種々相を適確に説明することができない、

というのが桑木の見解である。また、第二の点については、プラグマティズムは主観的観念論であるが故に、「客観的の真理」(同上、二二頁)の存在を説明するのに困難に陥ると桑木は論ずる。シラー流に言えば、仮説が自然淘汰されて、「社会に必要なものが残るといふが、茲に大変な仮定がある。社会といふことは一体何を意味して居るのであるか、若し経験が個々のものであって、ちっとも其処に常住不変といふものがないか、社会といふものは成立たぬ筈であります。」(同上) かくして、桑木は、プラグマティズムの経験論哲学によっては社会存在論は不可能である、と断じたのであった。

以上のように、プラグマティズムの心理学的ならびに哲学的(すなわち認識論的・形而上学的)根拠を、論理的に批判した桑木は、最後にとどめをさす形で、プラグマティズムのモットーであると桑木が考えるところの「真理は實際的效果を有するものたるべし」(前出)ということの意味について批判を加える。プラグマティズムは、はじめから、真理の体系性を無視しているが、しかし、「体系といふことからして真偽の標準を立てるといふことはどうしても避くべからざることであらうと私は考へて居る。」(同上、二四頁) ところがプラグマティズムは、真理の標準として、体系にかえるに「実用」をもつてする。しかし、この場合、「それがどういふ意味の実用かといふことから極めて行かなければならぬので大いに困難を感じる。」(同上) すなわち、実用にもいろいろの意味があるのであって、「俗に考へて居る実用」——桑木がプラトンをひきあいに出してあげている例でいえば、競馬の勝負あるいは株式の上り下りに関する先見のごときもの——といふ所から見れば真理といふことを説くには少し狭過ぎるだらうと思ふ。」(同上、二五頁)

以上で、プラグマティズムに関する桑木の原理的・論理的批判は終っている。そして、この長い講演の最後のところで、なお、次の二点を付け加えたのであった。

a、プラグマティズムの思想そのものは、けっして、現代において現われたものではなく、むしろからの「倫理実行に重きを置く所の哲学思想は皆『プラグマティズム』的傾向の中に入れて宜いのである。……所で概括すれば多少古昔からさういふやうな思想があるとして、どういふ時に其が現はれて来るかといふと、私のかんがへて見る所では哲学思想の衰へ掛つた時に現はれて来るやうに考へる。」(同上、二六頁) たとえば、プラトン、アリストテレスのごとき「偉人」が出た後の哲学沈滞期に、彼らに比して到底及ぶべくもないストア派、エピクロス派が現われたが、これらはプラグマティズムの傾向をもつものであった、というがごとくである。したがって、今日、プラグマティズムが出現した

としても、その将来はあまり有望ではなく、むしろ「悲観」的たるを得ない。

b、プラグマティズムは、仮りに学問としては承認されるとしても、「果して文学、美術の意義といふものを十分に説くことが出来るかどうかといふこと」(同上、二七頁)は疑問である。すなわち、プラグマティズムは、人間活動の「有要実用」という見地のみに立って、あまりにも「倫理的になり過ぎて居って芸術的自由の精神が欠けて居る」(同上)といわなければならない。

桑木は、しかし、プラグマティズムのいっさいを否定し去ったわけではない。理想主義の哲学者たる桑木は、プラグマティズムの「一、元論的」性格と、「世界を、我と離れたものと見ない」立場には、「参考になるべき点」を多くみいだしている。しかし、全体としてみるならば、「行為といふことに重きを置いて、殊に総てのことを実行、道徳といふやうな方からして説かうといふ風になって居るのは、純粹の哲学説として見る場合には稍や不完全なものではないかと思ふ。」(同上、二八頁)といわざるを得なかった。

この桑木講演が行われた哲学会例会の模様が、『哲学雑誌』二二七号の「彙報」に掲載されている。それは、当時の我が哲学界のプラグマティズムに対する姿勢をよく物語るとともに、桑木に対する田中王堂の反論の淵源となるものをも示していると思われるので、少し長いが、次に全文を掲げておく。

十二月十八日午後六時、例会を山上集会所に開く。左の講演あり。

「プラグマティズム」に就て

文学博士 桑木厳翼君

此問題は、近頃英米の哲学界を騒がせつつある問題にして、さきに紀平文学士の本誌上に論ぜらるゝあり、又元良博士の講義中にも之に論及せらるゝ所あるなど、次第に我国学界に於ても之に注目し始めたることなるが、これ等の事情の爲にや、当日の聴者は、元良姉崎等の博士及学士学生等総て七、八十名、会場に狭隘を告ぐるに至れるほどの盛況なりき。(筆記は論説欄に掲ぐ)

講演終るや、元良博士は立ちて、桑木博士は哲学衰へて、プラグマチズム起れりといはれしが、此哲学とは如何なる哲学なるかと質問せられ、桑木博士は、倫理の方面をのみ特に重ぜる所の、即ち宇宙全体の説明に任ずる所の哲学これなりと答へ。田中喜一氏は、プラグマチズムは哲学の衰ふる時に起るに非ずして、哲学が一般の進歩をなせることを示すものなり、古来哲学の学風の變遷に當りては、後の哲学は常に前の哲学よりも、より多くプラグマチックなるに非ずやと述べ、桑木博士更に反駁して答ふる所あり。元良博士は再び立ちて、此思想は從來西洋の思想の知的なるに対する反動として、意思若くは活動の方面をエムファサイズせるものなり、これ古来東洋に行はれし学風にして、東洋の学者が之を西洋に教へざる前に西洋が之に注目するに至りしは、吾人東洋人にとりて

遺憾のこと也、されどもこれ古来の学風の理中心的なるの反動として起れる一方面的のものに過ぎず、ただ時勢の要求に応じて起れるものなること先きの神秘主義の如しと説き、要は此主義と在来の知的哲学とを綜合して後に完全のものを得べしと説かれたり。姉崎博士も亦、桑木博士の所謂ユース (Use) といふことについて述べられ、弁駁又弁駁、近來茶話会に見ざりし所なりき。田中氏最も熱心にして、最後に起ちて更に述ぶる所あらんとせしも、時間切迫の為に中止するの止む可からざるに至れり。時正に十時前十分なりき。吾人は氏が更に論陣を整へて大なる気焰を吐かんことを望むものなり。(『哲学雑誌』二二七号、八二—八三頁)

三 論争の経過

桑木の講演およびその筆記論文の『哲学雑誌』掲載をきっかけとして起った敵翼・王堂論争の経過は次のとおりである。

(一) 桑木敵翼 「プラグマティズム」に就て (講演) 哲学会、明治三十八年十二月十八日。

(二) 桑木敵翼 「プラグマティズム」に就て (論文) 『哲学雑誌』二二七号、明治三十九年一月。

(三) 桑木敵翼 同上 (承前) 『哲学雑誌』二二八号、明治三十九年二月。

(四) 田中喜一 桑木博士の「『プラグマティズム』に就て」を読む 『哲学雑誌』二二二号、明治三十九年六月。

(五) 田中喜一 同上 (承前) 『哲学雑誌』二二六号、明治三十九年十月。

(六) 桑木敵翼 田中君に答ふ (其一) 『哲学雑誌』二二七号、明治三十九年十一月。

(七) 田中喜一 桑木博士の答弁の価値を論ず 『哲学雑誌』二二八号、明治三十九年十二月。

田中は、まず、右の(四)(五)の二回にわたって、桑木敵翼に対する反論を展開した。それは、先きに紹介した「彙報」に、「氏が更に論陣を整へて大なる気焰を吐かんことを望むものなり」とあったのに応えるものであった。この桑木批判において、田中はまず自分の哲学観を述べ、それを基礎として、桑木の見解を批判する。

1 田中の哲学観……田中は最初に、「僕は決して『ジェームス』式の『プラグマティズム』、または『シラー』式の『プラグマティズム』

に随喜する者ではない。」(『哲学雑誌』二三二号、二二頁)と断言して、桑木がプラグマティズムに関する知識と批判の主要な素材となしたシラ―およびジェームズの学説に対する田中自身の態度を明確にする。しかし、田中は、シラーないしジェームズの学説の根底にあるプラグマティックな精神がもつ現代的意義は、これを評価しなければならないと考える。田中によれば、現代世界の特徴はプラグマティックな精神の発展にみられるのであって、「随つて此の大精神の殊形たる個々の『プラグマティズム』に至つては各多少の欠陥を伴ふに拘らず、猶ほ現代の哲学思想の本流と見做されざるを得ぬのである。」(同上、二三頁) 哲学は日常生活の所産である。人間本性の固有性から生ずる矛盾をふくむ経験が哲学の素材であり、これらの経験の「具象的醇化」と「動力的改整」とが哲学の目的である。「かく一たび哲学の機能の明かになった以上は、あらゆる哲学的立言の価値は、総べての種類の立言と等しく、其存在の目的に対して役に立つや否や (Will it work, or not?) の一問によつて決せらるべきである。」(同上、二六頁)

Ⅱ 桑木哲学批判：田中からみれば、桑木のプラグマティズム批判はあやまりなのであるが、このあやまりは、桑木のプラグマティズム研究の不足から来るというような一時的なものではなく、桑木の哲学そのものがあやまりであることから来る本質的なものである。桑木の哲学のあやまりは、田中のいうところによれば、次の三点である。

桑木の哲学は、①没史的 (unhistorical) であること、②分割的 (separatist) であること、③實在論的 (realistic) であること。(同上、二七頁) これは、逆にいえば、桑木の哲学が、④歴史的・発展的見地をとらないこと、⑤一元論的でないこと、⑥観念論的でないこと、になる。

ところが、プラグマティズムの哲学は、まさに、歴史的・発展的見地をとり、一元論的であり、観念論的な哲学である。したがって、右の①から⑥までの特徴をもつ桑木の哲学において、プラグマティズムの真髓がみがされてしまったことも当然である。このように田中はいうのであるが、しかし、ここで注意しておかなければならないのは、田中自身は、上記のごときプラグマティズムをもって、絶対的に正しい哲学の立場であると主張しているわけではないということである。哲学は、その時代の活動や理想のいかんによつて異なった現われ方をするのであって、ただ、「現時」においては、哲学は歴史的・発展的立場をとり、一元論的にして観念論的であるべきである、というのが田中の強調するところであった。

以上のように桑木の哲学そのものを、その基本において論評した後で、田中は、桑木のプラグマティズム論を次の四項目に要約する。（『哲学雑誌』二三六号、一五—一六頁）

イ、桑木はプラグマティズムを主意説（voluntarism）に基礎をおくものとみている。

ロ、プラグマティズムは哲学思想が衰えなかったときに現われてくるものとみている。

ハ、プラグマティズムの実用主義は、かりに学問の世界では成り立つとしても、文学、美術の意義を十分に説くことができないのではないかという疑問をもっている。

ニ、行為のみに重きをおき、すべてを「実行道德」から説こうとすることは、「純粹の哲学説」としては不完全であるとみている。

これに対して田中自身は次のように主張する。（同上、一七頁）

ホ、プラグマティズムは、主知説を包和した主意説であり、主意説を包和した主知説である。

ヘ、プラグマティズムは、哲学思想の勃興期に際して発動するものである。したがって、桑木博士はプラグマティズムの出露を悲観するが、田中はその発動を楽観する。

ト、哲学の諸系統のなかで、正当に文学美術の意義を発揮するものは、ただプラグマティズムがあるのみである。

チ、純粹の哲学説の最高最優のものは、必然的に、プラグマティズム系の哲学説のなかに発見されるべきである。

このように桑木・田中の哲学が真向うから対立するのは、田中によれば「経験の事実を批判するに当りて、僕（田中）がつねに動力的、關係的、作用的の見方をとるに反して、博士はつねに静止的、絶對的、固体的の見方をとる」（同上、一八頁）からである。

Ⅲ 驚異の念について……田中は、桑木がその『哲学概論』（明治三十三年）や、大日本女子教育会哲学講話会綱目のなかの「哲学問題の起始」と題する講話のなか等で、哲学は自然および人生の現象に対する驚異・疑惑の念から生ずるものであると述べている点をとらえ、この桑木の見解は、プラトン、アリストテレス以来の伝統的な常識たるにすぎず、桑木自身の生きた現実的な驚異や疑惑の念、およびそれらと対決する姿勢がまったくみられないとして、桑木哲学における主體的契機の欠如を指摘する。（同上二—二六頁）

これに対して、驚異に関する田中の説はこうである。驚異とは、人の「生活系統」のなかで経験を通じて「心霊」「精神」が変化するとき、

この変化にともなうて生起する一つの事件にはかならない。いいかえれば、驚異とは新しい経験が生み出すところの精神上の出来ごとなのである。「吾人の精神生活は絶えず変化し発展して居るが、其経過の性質は多くの場合に於て、漸進的であり、改造的である。」(同上、三三頁)しかし、その経過は、いつも「漸進的」「改造的」なスムーズなものであるとはかぎらない。「吾人の境涯と理想との推移と共に」精神生活は「内部の紛争を醸し、遂に其の活動は四分五裂するの窮地に陥いる不幸を見る」場合がある。「かくして生ずる精神生活の分裂が即ち驚異である事件の起縁」(同上)なのである。この精神生活の分裂を統一するための理論探究の営みが哲学である。驚異が現実的であつて、はじめて、そこに「欲念」せられる哲学も、また、生き生きしたものであり得る。しかるに、桑木博士においては、現実の生きた驚異の念が働いていない。したがって、博士の哲学は、たんなる知識欲の満足を求めるものであるにすぎない。それは「実生活と何等の關係なき」(同上、三七頁)知的な遊戯にとどまるものである、というのが田中の主張であつた。

以上のごとき田中の桑木批判——それはまだ未完のものであつたが——に対して、桑木は前掲(六)の「田中君に答ふ」(其一)において、次のように反批判を加える。それは、田中の桑木批判は超越的批判であつて内在的批判ではなく、しかも、田中の理論は「没概念的」であり、そこからの当然の帰結として、田中の哲学は「偽哲学」である、というものである。

Ⅰ 「没概念的」であること……桑木によれば、さまざまの概念は、それぞれが一定の意味において使用されるものであるにもかかわらず、往々にして、この意味の相違を無視して、異なる概念を混同して使用することがある。このような概念の混同使用を、桑木は「没概念的」と名づける。田中にみられる没概念の一例は、「プラグマティズム」と「プラグマティック・スピリット」との混同であり、他の一例は、右の例を一般化した形で表現することになるが、哲学と哲学思想との混同である。(『哲学雑誌』二三七号、二〇頁) 桑木の見解では、プラグマティズムは哲学であり、プラグマティック・スピリットは哲学を生み出す精神あるいは広義の思想であつて、この両者は別個のものである。桑木は「哲学」を問題にして、その立場からプラグマティズムに関する論議を展開したはずであるのに、その最中に田中がプラグマティック・スピリットの問題をもち出すのは「没概念的」であり、まさに Ignoratio elenchi「論点すりかえの虚偽」ではあるまいか(同上、二二—二三頁)とというのが桑木のいふのである。

Ⅱ 田中の哲学が「偽哲学」であることについて……桑木の説にれば、驚異の念は、哲学思想を生み出しはするが、哲学そのものを生み出しはしない。「要するに我輩の所謂哲学は飽くまで一個の学である、理性の形式で整頓せられたものである。」(同上、二三頁) 驚異の念をひき起した事柄については、哲学以外の、たとえば宗教のごときものによっても、解明できるはずである。「人が哲学といふ窮屈な形式によるのは、いはば一様の「一種の」の誤植か」道楽である。……我輩は此意味に於て哲学の無用を主張したいと思ふ。」(同上、二四頁)

桑木にとっては、哲学は人生における有用性・実用性のごときものとは無縁な、一つの知的構成物である。田中の、人生における哲学の実用性の強調に反論するために、筆の勢いで「哲学の無用」を主張したのであるが、この場合の「無用」というのは、「有用」の反対概念ではなく、有用とか無用とかの問題を超えた知的世界に属する事柄であることを指摘したものにはかならないであろう。しかるに、田中が支持し、かつ主張するプラグマティズムの哲学は、哲学と精神(思想)とを混同するために、学たらんと志しながら、精神がもつ知以外の要素にわざわざいわれて、純粹な哲学であることができない。ここに「一種曖昧な哲学説となったものが『プラグマティズム』(『スピリット』ではない)である。『プラグマティズム』は哲学の趣味を解せざる哲学研究者の唱道した、偽哲学 Pseudophilosophie である。」(同上)

このように桑木は田中を罵倒しながらも、他方で、田中がプラトンの理論に基づいて「驚異」に関する説明をしている点は卓越したものである、と評価することを忘れてはいない。とはいえ、桑木は、驚異の念は知と情の作用によって生ずるものであって、そこに生ずる意志の活動とは、やはり、別物である、と考える。プラグマティズムがこの区別を無視して、かえって、意志の活動をもって知情を圧迫しようとするのはまちがいである。「學術の道楽性既に説けず、焉ぞ文芸の自由なる性質を説けやうか。『プラグマティズム』は支那思想に於て其弊を顕はした辞達而已矣主義となるの恐はあるまいか。」(同上二六頁) すなわち、プラグマティズムの立場では、言葉は相手に自分の意志さえ通じればそれで十分なのであって、余分の修辭は不要であるという言葉道具説にとどまり、言葉には道具性以外に、人間存在の基本的構造にかかわる諸属性・諸機能があるという事実を、みおとしてしまうことにはならないか、というのが桑木の反批判の結語的部分となっているのである。

右の桑木の「田中君に答ふ」(其一)に対して、田中は、ただちに、『哲学雑誌』の次の号(二三八号、明治三十九年十二月)に、前掲(Ⅱ)の「桑木博士の答弁の価値を論ず」を掲げて、再反論を試みている。

田中は、自分の桑木批判はまだ始まったばかりで、今後なお継続して批判を行う予定であるのに、結論もまだ明確になっていない段階で、桑木が返答をしかえたのは、フェア・プレーの精神に欠けるものであるとして、「苟も吾人の自由手腕を縛束するような障礙は、一切之が芟除に力めねばならぬ。」（『哲学雑誌』二三八号、四六頁）といきり立つのであった。田中にいわせれば、桑木の論述は、田中の真意を理解せずになされており、たんなる「語戯」（wordplay）（同、四九頁）である。「博士は僕の学説を「よく」研究するの義務があった」（同上、五〇頁）のに、それをせず、田中を超越的に批判し去ったと、田中は非難するのである。しかし、田中は超越的批判そのものを、かならずしも、全面的に否定するわけではない。時と場合によっては、超越的な批判が必要・有力であることもあるし、また、内在的批判が必要・有力であることもある。ただ、いまの場合は、桑木は田中説に対して、もっと内在的に考察する必要があると、田中はいうのである。

さて、この桑木に対する再反論における田中の主力は、桑木が田中を「没概念的」だといったことに対して「概念」とはなにかということを問うことによって、桑木説を論駁することに向けられた。

「吾人の精神生活は観念を材料として成り立って居る……」（同上、五七頁）。そして、「総べての観念は……次第に比較的に区別し得る二側面に発展」（同上）する。この二側面とは、「一方に心象、内容、又は知覚と称ばるるものと、一方に標章、意義、又は概念と称ばるるものである。」（同上）田中の説明によれば、前者すなわち「知覚」によって代表されるものは、個々の観念の内容を豊かにするものであり、後者すなわち「概念」によって代表されるものは、個々の観念間の関係を完全なものにすることを目的とするものである。かくして「知覚と概念とは固と独立の存在を有するものではなくて、単一なる観念に固有する二重性に与へた名称である。」（同上、五八頁）

このように、「概念とは観念の關係的側面に与へられた名称に過ぎぬのであるから」（同上、五九頁）、観念の結合關係が異なるに應じて概念もまた異なるものでなければならぬ。「吾人の生活の理想は絶えず変る。」（同上、六〇頁）理想が変化するといふことは、観念が変化することにはかならないであらう。とすれば、「昨日まで重要であつた概念も、今日はさ程重要ではなく、昨日までさまで感興を惹かなかつた概念も、今日は不思議に多大の感興を惹くやうになる。かくして概念間に新陳代謝は絶えず行はれて居るのである。」（同上）概念はつねに変化する。永遠不変の概念なるものはない。したがって、桑木のように「種々の概念が其れ其れ定つた意味を以て使用せら〔れ〕である」（同上、六一頁）といって、その概念を使用している人と、その具体的な場——つまり、コンテクスト——を無視するのでは、田中の論述が「没概念的」

であるといつてみたところで、まったく無意味である。以上が、桑木の田中説没概念的の批判に対する田中の反論の骨子である。

右の田中の概念論は心理学的説明である上に、論法がやや粗放であり、論旨も明快であるとはいひ難い。ただ、概念がつねに新陳代謝してゆくという考え方には、進化論の思想をみることでできよう。田中は、この場合、プラグマティズムというよりは、むしろ、進化論の立場を前面におし出している。このことは、この論文の末尾で、田中が次のようにいつていることから明らかであらう。近世において、「歴史的」という概念が積極的で豊かな意味をもつようになったのは、コント、ヘーゲル、および進化論の感化に負うところが大きい。なかでも「進化論より発足した学系」が大きな感化力をもった。「進化論に特殊なる見方は、事物の変化又は発展を説明し、統一するに有機体と、周囲との交渉の経過とするところに在って存するのである。」(同上、六五頁) 田中は、かくして、すべてのものごとを発展の相において捉えることが、「歴史的」なものの見方であるということを強調するのであるが、この点の主張は、この反論が(未完)となつていて、まだ継続する予定であつたためか、中途半端なもので終つていといわなければならない。そして、田中のこの未完の反論は、後続されることなしに、ここで中断してしまつたのである。

四 論争終熄とその後

桑木・田中の両者の論争は、回を重ねることに激越となり、冷静な学問的論争は不可能となるような情勢をみせていた。とくに田中の語法は感情的であり、それを受けて立つた桑木もまた、いくらか勇み足を踏むことがあつた。田中は桑木の哲学を「語戯」と呼び、桑木は田中の哲学を「偽哲学」であるときめつけた。こうなれば、もはや、両者のあいだに、相互に建設的な論争を望むことは無理である。桑木は「田中君に答ふ」を(其一)でやめ、田中は「桑木博士の答弁の価値を論ず」を(未完)の形で中絶した。明治三十九年の『哲学雑誌』一月号の桑木論文から発生した敵異・王堂論争は、同年の同誌十二月号の田中論文をもつて、満一ヶ年の激闘に幕を引いたのである。

この間、論争のさなかに桑木は東京大学の助教授から京都大学の教授に転出し、翌四十年六月にはドイツに留学することになる。そして、ベルリンから『丁酉倫理会倫理講演集』六七号(明治四十一年四月)に、「伯林の半年(便宜主義、自然主義、教権主義対プラグマティズム)」と

いう論文をよせる。これを読んでみると、桑木は田中との論争に結着をつけなかったことをかなり気にしているように思われる。このことは、この論文のはじめのところで、田中によって教えられたところの現実をみる眼をもって眼前のベルリンやドイツの事柄を観察して、ありのままに報告したいという趣旨のことを述べているあたりにうかがうことができる。

しかし、この論文においても、桑木は、プラグマティズムを「実用一方、御手輕御徳用」の思想であると規定し、「プラグマティズムは絶、對を嫌ふこと蛇蝎の如しだ、現在此瞬間に我々に使用せられて効果のある判断が即ち真だ、真を（「は」の誤植？）後生的なものだ、人々が真を作るのだ。偉大なる思想!? 大なる価値顛倒！」（『倫理講演集』六七号、九頁）というように、口を極めてプラグマティズムを揶揄している。

この「大なる価値顛倒」をめざすプラグマティズムは、今、桑木の眼前で操りひろげられているドイツ労働者のストライキにも似ている。すなわち、プラグマティズムは、「真理所有者といふ資本家に対する大反抗大ストライキだ、ジェームズの如きはさしあたり『ウェーバー』の除隊兵のような役目をして居るものだ。もし形而上学を『カピタリストの哲学』といへばプラグマティズムは確かに『アルバイター』の哲学」だ。『アルバイター』が反抗するのは面白い、然し彼等も方向を誤って居る。」（同上）

桑木のプラグマティズム実用主義観は、いぜんとして変っていない。むしろ強化されてすらいる。この点、巖翼・王堂論争によって刺激を受け、プラグマティズムの存在論ないし認識論に関して理論的興味をいだき、静かにその内在的研究にとりこんでいた朝永三十郎、得能文、西田幾多郎等に比して、桑木は、少なくともプラグマティズムに関しては、ジェームズ・シラーの理論についてみずから抱いた固定観念に固執しすぎたきらいがあったといえるであろう。このことは、桑木の周辺にいた当時の代表的な倫理学者たちについても、同様に指摘することができるであろう。

たとえば、中島力造は、すでに明治三十一年に、『倫理学十回講義』（富山房）を出版していたが、これに東大における「倫理学最近の傾向」（明治四十三年）と題する講演を加えて、右の書の新版をおなじ富山房から出版した（明治四十四年）。その講演のなかで、中島は、アメリカにおける倫理学の新傾向を紹介するに当って、デューイ・タフツ共著の『倫理学』（一九八〇年、明治四十一年初版）に触れ、デューイをプラグマティストであると規定して、次のように述べている。「かの実用主義（pragmatism）は、ウィリアム・ジェームズ（William James）——（本年〔一九一〇年、明治四十三年〕七月死す）——の説でありますが案外に学者間に勢力がありません。同意するものは極めて少ない。

……等閑に付してゐる。……又多くの学者に實用主義は哲学としてはどうであらうかとときくと、大概皆苦笑いたしておりました。ジェームズは花々しく面白がられて居りますが、敬服して居る人は多数ではない。」(同書、四〇四—四〇五頁)

私は、ここに、プラグマティズムの評価に関して、桑木・中島の両者を二重映しにしてみることができらうと思う。哲学の純粋性を称揚して、その「実用性」を蔑視する、このような雰囲気の中では、「實用主義」と規定されるプラグマティズムが、アカデミックな市民権を獲得し得なかったことは当然であつた。もっとも、桑木といえども、「哲学」を人生の実践面から完全に切り離して、たんなる「道楽」ごととしてしまうことに、なんらの良心的抵抗もなかったとはいえないであらう。桑木にとつても、「道楽」としての哲学は、彼の人生を充実せしめる重要な「道具」であつたといえるからである。だからこそ、桑木も、後年になつてから、次のように述べるのである。「明治三十四年頃からして即ち丁度十九世紀〔二十世紀の誤り〕の初めになりますが、プラグマティズムと云ふものが新しい學説として導かれて、それに就ては批評もありましたが、多少どんな人にも影響を与へて行つた。私は初め多少プラグマティズムに反対の点を唱へて其の紹介と批評を試みましたが、矢張り影響されても居りました。」

一方、桑木の論争相手の田中は、敵翼・王堂論争の中絶後も、いぜんとして評論活動を続けていたが、彼の関心は、ますます、社会の改造という実践的課題の方向に向けられていった。この間における田中流プラグマティズムの内容をうかがうのに適当な発言は、彼が、『丁酉倫理會倫理講演集』八九号(明治四十三年二月)によせた「女子教育雜感」という文章にみられる。彼はこの小論において、「役に立つ」ということの意味、すなわち実用性の意味を、女子教育の問題にことよせて、次のように述べている。「いふまでもなくあらゆる教育の目的は、役に立つ男や女を作るにある。……〔しかし、〕役に立つとか立たぬとかいふことは随分漠然たる問題である。……役に立つとか立たぬとかいふことは、全く立場によつて變ることであつて、是れを決定する標準は全くないやうにも思はれる。……」(『倫理講演集』八九号、五一—五二頁)

田中は当事の高等女学校教育に満足できなかった。その理由は、女学校教育は女子の「啓蒙」(enlightenment)の道具でなければならないのに、實際は、わずかに「習技」(accomplishment)の方便にしかなつていないからであつた。啓蒙とは理論的にもその能力を開発することであり、習技とは實際的な技能を訓練することである。両者は外形においてはあまり異なるところはないが、ただ、その根底または精

神において異なる。事を為すに当って、スペンサーがいうところの合理的 (rational) であることが啓蒙的なのであり、経験的 (empirical) にとどまっているあいだは習技なのである。このように主張するかぎりにおいて、田中は経験主義者ではなく、合理主義者である。プラグマティストといわれる田中王堂が、その女子教育論において、習技よりも啓蒙を、また、手芸的技能よりも理性的教養を、尊重していることに注意がはらわれなければならない。もちろん、田中は、教育一般において、日常生活に必要な知識や技能の要素を軽視しているのではない。彼は、むしろ、これらの知識や技能が、それらを「習ふ当人の性情中に瀰細化醸せられて、是等が全人を照らし、動かし、導く所の方針とならないならば、其効力は甚だ貧弱な」(同上、五四頁)ものになってしまうことを憂うのである。

したがって、世間には、高等女学校は理論だけを教えて実技を教えないから、その卒業生は役に立たないと論ずる者があるが、田中はこれとはまったく反対の意見の所有者であるということになる。「彼等の実用的たらざる弊害を矯めるには、彼等をして一層理論の意義を知らしむる外にないと思ふ。Why の内観を伴はざるただの What だけの事実は何万ありとも、彼等が処世の覚悟と方針を作るに何の効力もあるものではない。」(同上、五四―五五頁) 今日的女学校の卒業生が、女性としてはなほだ活用の才を欠いているのは、「決して彼等が理論に偏して居るからではなくして、不幸にして彼等はまだ本當の理論を持たない」(同上、五五頁)からなのである。

ここに登場する田中は、けっして、常識的な意味における実用主義者でもなければ、通俗的な意味における経験主義者でもない。むしろ、教養主義者であり、理想主義者である。かつて、田中は桑木に向って、自分はジェームズ式やシラー式のプラグマティズムに満足する者ではない旨を宣言したことがあったが、要するに田中は、桑木がジェームズないしシラーを通して理解したような意味での、通俗的実用主義者ではなかった。かれはむしろ、理想主義の哲学者であったのである。このことは、『哲学雑誌』三〇〇号(明治四十五年二月)に掲載された田中の論文「プラグマチズムの後」において、より理論的に、示されている。

この論文において、田中は次のようにいっている。「プラグマチズムは一つの精神であり、見方である。」(『哲学雑誌』三〇〇号、八一頁) プラグマティズムを、たんに、主意説、主観説、経験説等の言葉におきかえてみても、けっして、プラグマティズムを説明したことにはならない。「一口にプラグマチズムの目的とすると云つてみれば、其れは「流動する」経験を個体化することと、「個別的な」事件を流動化することにある。」(同上、八四頁) 経験を個体化するということは、経験を具体化しながら個別的経験としてみると同時にそれを普遍のレヴェル

において把握することであり、事件を流動化するということは、事件を相対の地平においてみると同時に、それを絶対へのつながりにおいて把握するということである。すなわち、個別的経験においては個別即普遍・普遍即個別であり、流動的事件においては相対即絶対・絶対即相対である。ここに、我々は、田中におけるヘーゲル流の弁証法をみることができ、かれは、宇宙および経験の統一原理たるべき哲学を、右のように、個別において普通の象徴を見、相対において絶対の象徴をよみとるところの、象徴主義的弁証法として確立しようとしたのであった。田中の理想主義的哲学の内実は、象徴主義的プラグマティズムであったということができよう。田中の「プラグマチズムの後」という論文の標題の意味は、田中が今プラグマティズムと絶縁したという意味ではなく、我が国の哲学は、真のプラグマティズムの本格的な洗礼を受けた後で、はじめて、宇宙と経験の真の統一原理たり得る哲学となることができる、という意味であったのである。

田中は、大正時代に入ってから、日本の文化は「象徴主義の文化へ」進まなければならないとして、これとおなじ題名の著書を出版している。⁽⁸⁾田中が「象徴主義」の思想を主張したことは、島村抱月とのあいだに交した自然主義文学論争以来のことであった。⁽⁹⁾田中は、けっして、いわゆる「自然主義」に組み込まれたわけではなかった。ここにも、プラグマティズムを自然主義と親近なものと規定する一般的なプラグマティズム観とは肌のあわない、田中独特の象徴主義的プラグマティズムをみることができよう。

ドイツの新カント派に主要な根拠をおく桑本巖翼の理想主義と、プラグマティズムに共感を抱く田中王堂の象徴主義とは、両者の論争の激しい言葉づかいにもかかわらず、原理的な対立はそれ程深いものではなかったといわなければならないのではなからうか。というのは、両者とも理想の探究を哲学に求めるといふ共通の土俵に立っていたからである。⁽¹⁰⁾ただ桑本は現実を超越した世界に理想を追ひ、田中は現実には象徴される世界に理想を求めた。この両者の精神の相違が、あの論争の激烈化をもたらしたのである。そして、この論争自体は、それ自身においては哲学的みのもりをもたらすことが少なく、かえって、「プラグマティズム即通俗的実用主義」という浅薄な理解を、教科書的範型として樹立することによってしまった。しかし、この論争は、日露戦争後の明治末期における我が国の哲学界と文壇の両方に対して、強い興味・関心をひき起こすことになった。前者への影響は、さきにも触れておいた朝永、得能、西田等による「純粹経験」の哲学的研究としてあらわれ、後者への波及は、自然主義一般および自然主義文学をめぐる、王堂自身をもふくむ評論家どおしの花々しい論争としてあらわれた。そして、桑本は大正期の哲学界の指導者として、また、田中は大正期の評論界の雄として、ともにその文筆活動を継続してゆくのである。

註

- (1) 私が参照したのは、名著普及会が複製した三巻本（昭和五十三年十一月）である。
- (2) 「プラグマティズム」の項は、右三巻本の第二巻、二五四五—二五四八頁に掲載されている。本論でこの項の文章を引用する際には、煩雑さを避けるために、頁数の表記は省略した。
- (3) 原文引用の際、前後関係を明確にする必要がある場合や、原文に誤植等があると思われる場合には、「……」を用いて、私の補足分を示した。以下同断。
- (4) F.C.S. Schiller, *The Definition of Pragmatism and Humanism*. "Mind", 54, Apr. 1905. シラーは後に、これに訂正を加えて、同名の論文を、"Studies in Humanism", 1907. の第一章として収録している。
- (5) 紀平正美「学問の分業と哲学の仕務」、『哲学雑誌』二二四号、明治三十八年十月、を指す。紀平も前記註（4）のシラーの論文に依拠して、プラグマティズムの定義を、七箇条にわたって列挙している。
- (6) この引用文も、句読点の場所の関係その他で、論旨が判明でないが、原文のまま引用した。
- (7) 桑本巖翼『明治の哲学界』（国民学術選書）、中央公論社、昭和十八年、六四頁。
- (8) 田中王堂『象徴主義の文化へ』博文館、大正十三年。
- (9) 島村抱月の評論「文芸上の自然主義」（『早稲田文学』、明治四十一年一月）に対して、田中は抱月の主張するような自然主義は「兎戯に等しい」としてその論理的矛盾を指摘し、特殊と普遍、現実と理想、主体と客体等の関係を一元論的に把握する立場——後に王堂が象徴主義と呼ぶようになる立場——を、すでに明らかに示していた。（「我国に於ける自然主義を論ず」、『明星』、明治四十一年八月）——吉田精一編『現代文学論大系』第二巻「自然主義と反自然主義」、河出書房、昭和三十年、一九五—二二六頁にその抄を収録。
- (10) 別刷『太陽』——「早稲田百人」、平凡社、昭和五十四年、「桑本巖翼」の項（峰島旭雄による）八九頁によれば、桑本は昭和二十一年にその生涯を終えるまで、四十年の長きにわたって、早稲田大学の教壇で、講師として哲学を講じた。この事実、桑本が早稲田派の哲学や文学に対して、心情的には、親近感をさえ抱いていたのではないかということを想像させるのである。